

教養外国語教育研究 部会報告

人文学部 荻部恒徳 他

1998年度には第8回研究発表会が10月16日(金)、午後4時20分より6時まで松風会館2階大会議室で行われた。今回は「初修外国語集中授業の内容・方法・成果について—その実践例」をテーマに4外国語の集中授業の担当者の報告を聞くことができた。快く発表を引き受けて下さり、ユニークな内容・方法によって、素晴らしい成果を上げておられる実践例をご披露下さった先生方に心から感謝申し上げたい。

本部会の研究発表会は今回をもって3人の現運営委員による開催を終わることになります。本部会が新たなテーマで新たな運営委員の元で再出発される日が早く来ることを祈っております。これまで御協力を頂いた先生方に御礼申し上げます。
(運営委員)

I. ドイツ語集中コース

金子一郎

1. 教育目標:

ドイツ語集中コースはこの数年来、日本人とドイツ人担当者双方に共通の問題意識に基づき、きわめて明瞭な教育目標を追求してきた。それは制度化された外国語教育において転倒している観のある手段と目的の関係をもう一度逆転させることにある。例えばドイツ語の教育においてその文法体系、語彙などの習得はいかなる意味においても

それ自体が目的化されてはならない。これらについての知識がドイツ語を使いこなす能力のための手段にすぎないと同じように、この能力もまた畢竟学習主体の精神活動の手段として位置付けられなければならない。当コースは、この手段と目的の混同と、よく言われる学生の意欲の低下、モチベーションの欠如、ひいては外国語教育の形骸化は密接に関係している、という認識から出発し、普遍的な言語体系についての知識を、言語主体である学生一人一人の個別的な言語能力に結びつける回路の形成を目指している。

2. 方法の一例: 共通教科書の廃止/個別読解

当コースの日本人担当授業(週2回)の年間プログラムの最終段階は個別読解である。12月半ばから年度末にかけて学生は、それぞれ自ら選択したドイツ語テキスト一冊の読破に取り組む。受講生30人が30種の異なるテキストを読むことになるが、共通テキストを排した狙いは言うまでもなく、手段としてのドイツ語を、言語主体の個別で多様な関心に従属させることにある。従属させられるのはドイツ語ばかりではない。授業時間の大半は学生の質問に充てられ、教師にとっては些か目まぐるしい時間となるが、このように授業の主体がほぼ完全に学生の側に移ることにより、学生は授業と教師をも自己の言語行為に従属させることになる。

個別読解の成果は発表会において示されるが、その情報量とレベルはこれまでの共通テキスト方式と較べて目を瞠るものがある。しかし他面問題もある。このような言語主体として自由な言語行為を展開する機会は、意欲的な取り組みの必要条件であると同時に、その逆の場合にも好条件となる。例年2割程度の学生が義務的読書でお茶を濁すためにこの自由を活用する。教授法の一層の工夫が必要であるが、同時にクラスの少人数化も視野に入れておきたい。